

大 博物館だより

No. 17
1997. 4

津山郷土博物館



後醍醐天皇綸旨(複製) 本館蔵 原物 和歌山県 熊野速玉大社蔵

建武2年(1335)12月18日、後醍醐天皇が足利尊氏から没収した美作国田邑地頭職を新宮熊野速玉大社に寄進した内容の綸旨である。綸旨とは、天皇近侍の蔵人がその命を他者に伝達するための文書様式をいう。天皇の命でありながら、形式上の指出者は蔵人(本文書では蔵人右少弁岡崎範国)であるので、書止めに「誠恐頓首謹言」と丁寧な文言を添えている。充所は欠損しているが、「熊野山檢校僧正御房政所」と復元されている。

足利尊氏は同年10月鎌倉で後醍醐天皇に反旗を翻したが、その対抗措置として天皇は尊氏の所領を没収したのであろう。美作国田邑荘は、現在の津山市上田邑・下田邑付近にあった中世の荘園で、鎌倉時代末期と推定される「足利氏所領奉行人交名」に田

宮(邑カ)郷とみえている。(『岡山県史』中世I、233頁)ので、尊氏以前より歴代の足利氏所領であったと推定される。足利氏と美作との関係は深く、足利氏第4代の義氏が、よく舞う猿を美作国から鎌倉将軍に献上した(『岡山県史』編年史料1106)のをはじめ、讃甘荘(英田郡)・新野郷(勝田郡)・田中郷(津山市)・埴和東西郷(旭町)・稲岡南荘(久米南町)など多くの足利氏領荘園が美作国内に存在している。これらの事実から足利義氏が美作守護であったとの想定もなされている(『岡山県史』中世I、235頁)。その後の田邑荘地頭職の去就については明証がないが、おそらく尊氏の実力からして、このときの後醍醐天皇の寄進の約束は空手形となったのではなかろうか。

美作の国名について

1

『続日本紀』和銅6年(713)夏4月乙未条に次の記事がある。

割備前国六郡、始置美作国。

新訂増補国史大系本『続日本紀』は「六郡」の前に「英多・勝田・苦田・久米・大庭・真島」の6郡名を記すが、これは『続日本紀』写本の一つによって補われたものであり、新日本古典文学大系本『続日本紀』のごとく具体的な郡名を欠くのが本来の形と思われる。しかし、『続日本紀』以下の正史や平城宮跡出土木簡などから、6郡の内訳が先の英多以下であることは確実である。

2

さて、奈良時代初頭の和銅6年に美作国が新設された理由については、大別して二とおりの考え方がある。第一は、政治的背景を重視する見方である。吉田晶は、美作地域が広義の吉備地方に含まれながらも、畿内勢力にとって、北方から吉備勢力を抑える拠点であり、かつ畿内から出雲へ通じる交通の要路である。6世紀中葉以降、畿内勢力は吉備一族を制圧するため鉄生産地でもある美作地域の直接的支配をはかろうとする。このことが後に令制国として美作国が分立する歴史的前提と理解するのである

(『吉備古代史の展開』1995年)。一方、第二説は特別の政治的理由はなく、単なる統治技術上の事情によるとする。中野栄夫は中央からの陸上交通が備前と美作では異ならざるをえないという政策上の理由を想定する(『富村史』1989年)。

前者の中央権力による吉備勢力の分断政策を背景とする見方は魅力的ではあるが、吉備地方の分割は備前・備中・備後という形で、すでに7世紀末には完了しており、大宝令の施行後の8世紀初頭には、吉備地方にも中央集権的な国郡制が貫徹しつつあり、和銅6年の時点で、改めて備前の分割を強行してまで警戒するほどの吉備の在地勢力があったとは思えない。しかも、美作分国と同時に、丹波国から丹後、日向国から大隅国がそれぞれ分立しており、前年の和銅5年にも越後から出羽、5年後の養老2年(718)には能登・安房・石城・石背4国がそれぞれ新立している。このように美作分国の前後には、

多数の令制国が分立しており、これらはそれぞれの歴史的事情よりも、律令制的地方支配を実施する過程での政策上の調整と理解すべきと思うのである。したがって、やや平凡ではあるが、美作分国の理由については、律令国家による統治技術上の問題とするのが正解ではあるまいか。

3

ところで、美作は現在「みまさか」と発音されているが、『和名抄』刊本に「美万佐加」、同東急本に「三万佐加」の訓がある。さらに、「催馬楽」美作の歌に「美万左可」とあり、この歌は貞観元年(859)清和天皇の大嘗祭で美作国から奉納された「久米の佐良山」歌の一節であるので、遅くとも9世紀中頃以降は「みまさか」と読まれたことは確実であろう。では、その美作(みまさか)の名義はどうかであろうか。この問題については、古くから様々に論ぜられ、諸説紛々というのが実情である。

今、その主な説をあげると、①甘酒説、②地名説、③美真坂説、④水沼米ゆる説、⑤皇孫繁米説、⑥備前説があげられる。①は『苦田郡誌』に一説として紹介されている。「甘酒(うまさか)」の義で、美作は古来酒をもって名ありとし、その傍証として『万葉集』巻4-554の「いにしへの人の食したる吉備の酒病めばすべなし貫賞賜ばらむ」をあげる。だが、万葉歌の「吉備の酒」を美作と特定する根拠はなく、諸注釈の指摘するように、近世名産の三原の地酒や鞆の保命酒などからすれば、むしろ備後を第一候補にあげるべきであろう(澤瀉久孝『万葉集注釋』巻第四)。平城宮跡出土木簡や『延喜式』など古代の史料によっても、とくに美作から都に酒を貢納した様子は窺えない。このように、近世以前の美作は国名となるほどの酒の特産地であったとは思えないのである。

また、②の地名起源説は、『苦田郡誌』に三坂山(みさかやま・大庭郡)、美甘坂(みかもさか・真島郡美甘郷)、『岡山県通史』に美和坂(みわさか・苦東郡美和郷)などがあげられているが、単なる語呂合わせの域をでず、しかもなぜ美作地域の特定の地名が国名となるのかが解明されていない。③は『津山市史』で、「みまさか」のうち「み」と「ま」は美称で「さか」が本体とする。そして、美作が山陽道から出雲へ越えるための吉備の坂の国だとする(『津山市史』第一巻、1972年)。確かに、美作は中

国山地の南麓部に位置し、地形的には坂の国といえるが、それなら「みさか」ないし「まさか」であってしかるべきで、み・まと美称が二つも重なるのは不自然であろう。

4

④の水沼栄ゆる説は、八木意知男の唱えるところ
で、津山盆地にかつて存在した大規模な湖沼にちなむとする。八木によれば、その湖沼は、遅くとも平安時代初期までは実在したもので、現在の津山市街地を中心とする標高100mの等高線で囲まれる吉井川流域で、東は新田付近、南は押淵、西は二宮、北は沼付近に及ぶ広大な面積を占める。二宮高野神社の古伝説や中世以前の社寺の分布、それに中島・沼などの現存地名などによって証明される。このような津山盆地は備前側からみて「水の豊かに栄ゆる国」と認識された。このことが、和銅6年の分国にあたって、津山盆地を中心とする美作国が「水沼（みぬま）栄（さか）」と命名された理由とするのである（八木意地男『歌枕の探求Ⅱ』1986年）。八木の所論は大変興味深い、古伝説や現存地名は小規模な沼沢地の存在を示しても、それを広大な湖沼に結びつけるのは論理の飛躍がある。八木はその証明に地質時代の津山海の存在を援用するが、それは新第三紀中新世（1500万年前頃）の第一瀬戸内海の一部で、日本列島形成のはるか以前のことである。そもそも津山湖沼なるものは、現在の押淵付近の吉井川に長大な堰堤を築かないかぎり地形上存立不可能ではなかろうか。

⑤は栗原薫の唱える説で、御孫（みま）栄（さか）を名義とする（「美作国の国名について」『神道史研究』26巻1号、1978年）。時の元明天皇が幼い孫の首皇子（後の聖武天皇）の将来を祈願して、新置の美作国に嘉名をつけたとする。栗原はその背景として、次のような歴史的事情を想定する。

8世紀の初め頃北九州に八幡神とその母神を祀る集団が存在し託宣を事としていた。ところで、時の元明天皇の不安は孫の首皇子の将来であった。なぜなら、当時天武天皇の皇子はなお在世中で首皇子の皇位への道は必ずしも安泰とはいえなかったからである。このような皇室の不安と単人の反乱を見て、八幡の託宣に「美作国分置等の措置をすれば、首皇子は安泰で単人の反乱も鎮定する。その神教の驗として美作国のうなでの森に白鳩が

現れるだろう」と予言した。その直後の和銅6年正月4日に託宣場所のうなでの森（高野神社）に白鳩の祥瑞が出現したので、備前国司らは美作分置を献策した。そこで、朝廷はこれをうけて、先の託宣のとおり美作国を分置することとし、その国名にもことさらに嘉名を付したのである。

以上の栗原の所説もはなはだ興味深いものであるが、美作分国直前の八幡神の託宣なるものは何ら史料の根拠がない。また和銅6年正月の祥瑞出現も『続日本紀』に「備前国献白鳩」とあるのみで、具体的な出現場所を示さない。これを美作高野神社のうなでの森とするのは栗原の全くの推論である。しかも、その前提として『万葉集』巻7-1344の「真鳥すむ 卯名手のもりの 菅の根を 衣にかきつけ 着せむ子もがも」を通説の大和国高市郡雲梯神社（現榎原市）ではなく、美作高野神社に比定することも必ずしも証明されていない。このように、栗原説は傾聴すべき点を含みながらも、美作の国名の説明としては説得的とはいえない。

5

⑥は提唱者を明確にできないが、先の八木の著書に引用されている。美作の語源は「備朔」で備前の北方の意とする。これ以上の詳しい説明はないが、これを筆者なりに敷衍すれば、「朔」には北方の義があり（『大漢和辞典』）、美作は備前の北部にあたるので、和銅6年4月の分国にあたり「備朔」と命名した。ところが、翌月全国の国・郡・郷名に好字を着ける政策（『続日本紀』和銅6年5月甲子条）をうけて、これを「美作」と改称した。それがのちに「みまさか」に転訛したのである。図式化すれば、備朔（びさく）→美作（びさく）→美作（みまさか）の順に変化したということになる。この備朔説は語源的には明快であるが、分国時北方を表すのに、なぜ備北でなくて備朔とされたのか、また好字政策のおり、備前・備中・備後が改称されていないのに、なぜ備朔だけが美作に改める必要があったのかなど、いくつかの疑問がある。

以上、美作の国名について、諸説を検討してきた。その結果各説一長一短であり、今ただちに結論を下すことは困難である。しかし、その中でも⑥の備朔説が最も無理が少なく、また冒頭に述べた美作分国の理由とも合致するように思われるのである。

（湊 哲夫）

平成9年度 博物館行事予定

行事名 日程	展 覧 会	町 奉 行 日 記 を 読 む I	古 文 書 講 座	美 作 孝 民 記 を 読 む	近 世 史 講 座	夏 休 み 子 供 歴 史 教 室 弥 生 土 器 を つ く る	美 作 の 文 化 財 め ぐ り (友の会)	江 戸 一 目 図 屏 風 特 別 展 示
H9 3	3. 8 企画展 衆 楽 園							
4	4. 20							4.24
5		● 5. 9			● 5.22		● 5.18	5.22
6		● 6.13			● 6.26			
7		● 7.11			● 7.23	●● 7.24・25		
8						● 8.19		
9		● 9.12			● 9.25		● 9.21	
10	10. 4 特別展 製鉄の起源をさぐる	● 10.10			● 10.23			
11	11. 9	● 11.14			● 11.27		● 11. 9	11.13
12								12.11
H10 1		● 1. 9			● 1.22			
2		● 2.13			● 2.26			
3	3. 14 企画展 城下町のくらし	● 3.13			● 3.26		● 3. 8	
4	4. 19							

<博物館入館案内>

- ・開館時間 午前9:00～午後5:00
- ・休館日 毎週月曜日・祝日の翌日
12月27日～1月4日・その他
- ・入館料 小・中学生 100円(80円)
高校・大学生 150円(120円)
一 般 210円(160円)
※()は30人以上の団体

大 博物館だより No. 17

発行年月日 平成9年4月1日
編集・発行 津山郷土博物館
〒708 岡山県津山市山下92
☎(0868)22-4567 ファクス(0868)23-9874
印 刷 有限会社 二 葉

大 は津山松平藩の印印で剣大といい、現在津山市の市章となっている。